様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月 １５ 日現在

機関番号：２６２０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ０３０７５

研究課題名（和文）ハンセン病医療倫理学の創出に向けた学術的基盤の構築とカリキュラム開発

研究課題名（英文）Construction of Academic Foundations and Development of a Curriculum for the Creation of Medical Ethics of Hansen's disease

研究代表者
近藤　真紀子（前田真紀子）（KONDO, Makiko）

香川県立保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：７０２４３５１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,200,000円

研究成果の概要（和文）：1.「ハンセン病医療倫理学(医療系)」「ハンセン病と人間の尊厳(小中高大学生)」のカリキュラムを構築し、出前授業を積み重ねた。２．講義の充実を図る基礎研究として、治験による眼球摘出事例の臨床倫理、終生隔離が齎した実存的苦悩、他者に理解し辛い知覚障害、ハンセン病者が捉えたコロナパンデミックについて、質的帰納的に分析した。３．ハンセン病者が人生を賭して得た叡智を伝える教材として、「療養所の自然の美しさと祈り」をコンセプトとする書籍を刊行し、加えて、デジタル教材の充実を図った。４．発展の布石として、「ハンセン病倫理研究会」の創設、機関紙「ハンセン病と人間の尊厳」を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ハンセン病は、古来から差別の対象であり、明治以降は、強制収容・終生隔離、療養所内での非人道的処遇(断種手術・胎児標本・懲罰など)が行われた。これらは、アウシュビッツに匹敵する人権蹂躙であり、特に自律尊重・無害の原則の侵害が著しく、原因の主翼は医療者にある。入所者への処遇の非人道性は、国賠訴訟で白日に晒され、断罪された。国は謝罪、法曹界も謝罪(特別法廷)したが、医療倫理からの検証は十分ではない。一方、ハンセン病回復者の平均年齢は86歳を超え、終焉の時が近づいている。二度と同じ過ちを繰り返さないためには、医療倫理・人間の尊厳の視点から、ハンセン病を語り継ぐことが重要である。

研究成果の概要（英文）：In Japan, patients with Hansen‘s disease were forcibly detained, followed by lifetime isolation. To prevent the same mistakes, it is necessary to establish medical ethics for Hansen‘s disease. This project primarily constructed a curriculum on "Hansen‘s disease and Medical Ethics" (for medical students), and on “Hansen‘s disease and Human Dignity” (for elementary to university students), which initiated a series of on-site lectures. Subsequent qualitative analysis of survival narratives elucidated the ethical issues of lost sight due to clinical trials, the structure of spiritual pain from lifelong isolation, perceptual disorders, and their perception of the COVID-19 pandemic. Our published book, "The Beauty of Nature and Prayer in Sanatoriums," and the digital teaching materials, convey the wisdom gained through a life of hardship. Finally, the Society for the Ethics of Hansen‘s disease was established, and the journal “Hansen‘s disease and Human Dignity” was published.

研究分野：看護学

キーワード：ハンセン病　医療倫理　人間の尊厳　カリキュラム開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ハンセン病は、古来から天刑病としての差別をもたらし、明治以降は、警察権力による強制収容・終生隔離、療養所内での非人道的処遇(断種手術・胎児標本・懲罰など)が行われた。これらは、アウシュビッツに匹敵する人権蹂躙であり、特に自律尊重・無害の原則の侵害が著しく、原因の主翼は医療者にある。

入所者への処遇の非人道性は、国賠訴訟で白日の下に晒され、断罪された。国は謝罪、法曹界も謝罪(特別法廷)したが、生命倫理・医療倫理からの検証はなされていない。医療倫理からの検証が進まなかった原因は、一般の医療職の無関心(医学的・法律的に既に解決)・無知(特殊な施設での出来事)、生命倫理の方法論の不備，現在の水準では倫理原則の侵害が自明、療養所関係者は現在進行形の課題解決に忙殺、などが考えられる。

一方、全国13の療養所で暮らすハンセン病回復者の平均年齢85.3歳・1426名(2017年9月末日現在)，この10年間で1464名が死亡し、わが国のハンセン病医療は、近い将来、終焉を迎える。戦争・原爆・アウシュビッツ・震災など、特異な体験は当事者にしか語れず、体験者の死をもって語り部を失う世界的損失となる。

ハンセン病医療の終焉に当たって、医療者がしなければならないことは何か？　それは、ハンセン病者の慟哭を、我々の患者に経験させないこと、我々が二度と人権蹂躙に加担しないことである(次世代を含む)。そのためには、①これまで顧みられなかった医療倫理の視点からハンセン病問題を再構成し、ハンセン病医療倫理学を創出すること、②ハンセン病の歴史とハンセン病者の慟哭を正しく理解し、それを未来の問題解決に活かすことのできる医療人・研究者を育成することである。

2. 研究の目的:ハンセン病医療倫理学を創出し、カリキュラムを開発する。

3. 研究の方法:質的研究手法を駆使して、各研究目的を達成する。詳細は後述する。

4. 研究成果

(1)カリキュラム開発と出前授業

①「ハンセン病医療倫理学」および「ハンセン病と人間の尊厳」のカリキュラム構成

a)カリキュラムの構成要素：「基盤となる知識(ハンセン病の病態生理・歴史)」「ハンセン病者の艱難の体験を知る（ハンセン病者のライフレビュー、視覚障碍・知覚障害の模擬体験)」「ハンセン病の本質を学ぶ（語りに含まれる普遍的意味)」「艱難を超えて生きる(ハンセン病者が人生を賭して得た叡智)」「対象特性別要素」で構成する。

b)教育方法:「講義」「ハンセン病回復者の講話・交流」「療養所スタッフとの交流」「体験学習」「療養所訪問」「ディスカッション」を組み合わせる。

c)対象特性に沿ったカリキュラム構成

i)基盤教育：病態・歴史は、対象特性に関係なく、ハンセン病を学ぶ上での基盤となる。

ii)小・中・高・大学生・社会人を対象とした「ハンセン病と人間の尊厳」:対象特性を考慮し、小学生ではいじめ、中学・高校生では艱難を超えて生きる、大学生では専攻する学問領域との関連性について探求する。

iii)医療系学生を対象とした「ハンセン病医療倫理学」:医療倫理の視点からハンセン病問題を分析し、現在の医療現場で起こっている倫理的問題の解決への活用方法を探求する。

ⅳ)語り部養成：対象とコンセプトを明確にして教材を作成し、語り部活動を実践する。

②出前授業の実績

a)社会人：放送大学　岡山学習センター，岡山県看護協会．b)大学(一般)：岡山大学　教養教育科目，放送大学　卒業研究，ハンセン病回復者と大学生の交流事業（大島青松園 / 岡山大

学・香川県立保健医療大学)．c)大学(医療系)：香川県立保健医療大学，岡山大学　医学部保健学科，岡山大学　卒業研究．d)高校：立命館慶祥高校，岡山県立邑久高校．e)中学校：立命館慶祥中学校，高松市立玉藻中学校，高松市立牟礼中学校，さぬき市立さぬき南中学校，宇多津中学校．f)小学校：高松市立牟礼南小学校，さぬき市立寒川小学校，さぬき市立造田小学校．g)保育園・幼稚園：善通寺市仲多度郡保育保健研究会．

③学生の学び

以下の５つの質問に対する学生の記述を質的帰納的に分析し、学生の学びを概念化した。対象は、国立大学　教養教育科目の受講生(11 学部)である。

a)ハンセン病の差別はなぜ始まり、なぜ、今なお終わらないのか:【外観の変化に対する恐怖】【治療の確立していない感染性疾患であったこと】【誤った知識の流布と伝承】

b)ハンセン病の本質はどこにあるのか：【異質なものを排斥する人間の本能】【無知，無知を正す意欲の欠如】【強制力をもつ権力者の判断の誤り】の３つが、【病気に苦しむ人をさらに追い詰めた】

c) ハンセン病問題の本質が現代社会にも共通してあるとすれば、どんなことだと思うか？：「同性婚、障碍者差別、男女差別など」「少数民族の排斥による文化が失われていくこと」「ネット上の匿名の攻撃」「いじめ」などが現代でも共通する現象であり、これらは、「誤った情報に基づく他者への攻撃」「何となく怖い、何となく自分と違うといったあいまいな思いから始まる差別」「自分や大多数を優先し、個を大事にしない」ことによって生じる。

d) c)の問題が、形を変え時代を超えて繰り返されるのは、なぜか？：【他者を攻撃することによる自己の防衛(生存本能)】【自己完結した自己世界の外の出来事への無関心】【多様性を認め合えない社会】【親から子へのいびつな伝承（間違った知識と負の感情)】

e) 上記の問題を解決するためにどうすればよいか？：【多様な価値を認め合う社会】【弱者に寄り添う努力】【効果的な啓発活動】【リーダー】が必要．

(2)講義内容を充実させるための基礎研究

ハンセン病者の語りに含まれる普遍的意味の抽出に向け、以下の研究を行った。

①治験による眼球摘出と医療倫理

ハンセン病回復者 A 氏は、新薬投与が原因で失明し眼球摘出した。A 氏の語りを、Jonsen の臨床倫理四分割表を用いて分析し、当時の医療の何が倫理的に問題であったのかを解明した。

a)医学的適応：人体実験に近い治験・副作用出現時の不適切な対応から、無害・善行の原則に抵触する。b)患者の意向：十分な情報が提供されていないこと、拒否権が保証されていないことから、自律尊重の原則に抵触する。c)周囲の意向：杜撰な治験による重大な健康被害は、その他の多くの人権蹂躙の一つに位置づけられる。また、治験による健康被害も A 氏にとどまらず、多くの患者に及んだ。d)QOL：一生涯にわたる実存的苦悩をもたらし、QOL を著しく低下させた。無害の原則に深く抵触する。e)総括：当時の医療水準・医療倫理を勘案しても、自律尊重・無害・善行・正義の原則の全てに抵触していると言わざるを得ない。

②終生隔離がもたらしたスピリチュアルペインの構造と立ち直り

ハンセン病回復者 B 氏は、《将来を夢見て燃えていた》時期に発症した。《一生、療養所から出られない現実を突き付けられた》ことで、《夢も希望も一切断ち切られた》《自分の人生は終わった、後は息をするだけ(絶望)》と感じ、《死にたい》と《怖くて死ねない》の間で葛藤し、やがて、《何をするのも空しい、投げやり》となり、《患者作業をさぼりギャンブルに耽った》。一方、静寂な夜には《生きている実感がなく》《なぜ生きているのかを自問自答し》《死ねない自分をそれでも人間なのかと責め》、《絶望》へと至る負のスパイラルへと陥った。さらに、人

生を切り拓く旧友・食い扶持を自分で得る犬猫・自殺を遂げた仲間・国と闘う仲間・まじめに働く仲間との比較が、苦悩を更に深めた。B氏の苦悩の本質は、【自分の力で人生を切り拓く自律性を奪われたスピリチュアルペイン】であった。

B氏の苦悩の時を《母と妻が支え》、《苦悩の本質を知る自治会の長老は静かに見守った》。やがて《時の癒し》により、B氏に《このまま此処で野垂れ死んで良いのか》という内省が生じた。その僅かな心の変化を見逃さなかった自治会の長老が、全国ハンセン病療養所入所者協議会(全療協)の東京本部への赴任の道を作り、新天地での体験、帰郷後の自治会のリーダーへの登用により、B氏は《人生を切り拓く膨大な心的エネルギーを注ぐ対象》を見い出した。B氏の転機は【人生の流れが変わる】ことであったが、それには、入所後30年の月日を要した。

③知覚障害

ハンセン病では、らい菌により末梢神経障害が起こる。知覚障害は、警告としての痛みを感じないが故に、微細な傷から骨髄炎・四肢切断を招き、重度の火傷に至る重大な症状でありながら、主観的症状であるが故に他者には理解し難い。加えて、電撃痛を含む神経痛が生じる。知覚障害への対処を明らかにするために、知覚障害を有するハンセン病者に半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。

ハンセン病回復者の知覚障害への対処は、【1.手先の器用さを補う工夫をする】【2.火傷予防の工夫をする】【3.他者のサポートをうまく引き出す】。【4.自分を甘やかせず努力し続けることで、不自由なりに知恵が生まれ困らなくなる】【5.火傷や怪我を繰り返して、危険を体に覚え込ませる】【6.痛みを何とか紛らわす方法を考える】【7.痛みや障害を越える心の支えを得る】【8.知覚障害のある盲人の苦労を慮り、自分はまだまし・皆が通る道だと考える】に集約された。

④ハンセン病者の捉えたCOVID-19パンデミック

COVID-19 パンデミックが発生し、わが国でも、陽性者・医療従事者・運送業者への誹謗中傷が社会問題となった。本研究では、感染症差別の被害者(当事者)であるハンセン病回復者が、COVID-19 パンデミックをどのように捉えたのかを明らかにするために、社会情勢を理解し自分の考えを語ることのできるハンセン病回復者に半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。

現在進行形で進むコロナ禍への対処として、【1.コロナが入ってくると、ひとたまりもなく一網打尽にされるので、外との交流が途絶えて寂しいが、主体的に自粛する】【２.自分達を閉じ込めてきた島が、コロナから守る砦と化すが、島の唯一の開口部が最も頼りにする職員で、唯一の交通手段（船）が三密になる】の2つのカテゴリーが生成された。COVID-19・ハンセン病を含む感染症で起こる差別・排斥の深層として、【３.目に見えない恐怖・感染しないという思い込み・個人の特定が誹謗中傷・排斥を生み、煽り・感染防御のやりすぎが攻撃の増幅と集団化を促す】【４.差別の本質は存在を消されることであり、根深い差別・見た目の変化による人格否定・隔離に一生涯を捧げる点で、ハンセン病はコロナとは違う】の2つのカテゴリーが生成された。差別被害の当事者のまなざしとして、【５.コロナ禍を冷静に見つめ、差別を受けた当事者として処方箋を示す】が生成された。

(3)教材作成

①書籍出版:ハンセン病回復者が人生を賭して得た叡智を伝える

「ハンセン病医療倫理学」「ハンセン病と人間の尊厳」の講義で使用する副読本として、『ハンセン病者の生きた美しき島　大島―自然の語り対話する哲学者　脇林清の半生と写真集』を風間書房より刊行した。本書では、ハンセン病に罹患することで過酷な人生を歩んだハンセン病回復者　脇林 清氏のライフレビューと対比する形で、脇林清氏が撮影した療養所の存在する瀬戸内海 大島の美しい自然の写真を収録した。「療養所の自然の美しさと祈り」をコンセプト

に、療養所の自然と語り合う中で、人智を越えた大いなる存在とつながり、命の根源へと向かった脇林清氏の哲学的思索で構成した。

ギリシャ哲学から紐解く哲学者　出村和彦先生(岡山大学)による解説は、ハンセン病回復者の思索を哲学へと昇華し、「ハンセン病者による在野の哲学」という新たな分野を切り拓く可能性を示唆した。ハンセン病という病いが、生きることの根源を問う病いであるからこそ、人間存在の根源に迫る哲学へと向かうと考えられる。

アウシュビッツがホロコーストの再来を押さえ、原爆体験が核兵器使用の抑止力となるように、ハンセン病は人間の尊厳・医療倫理を考える上で、教訓として語り継ぐ必要がある。一方、いじめ・虐待などの現在進行形の苦しみの中にある子ども達、社会が激変し先が見えない未来を生きる若者に対して、本書は、実存的苦悩を超えて生き生きと生き、エリクソンのいう統合 VS 絶望(叡智)を体現する、ハンセン病回復者の人間的強さ・優しさ・撓やかさを伝える書である。

②デジタル教材の作成

ハンセン病回復者の体験を広く学ぶためのデジタル教材を作成した。

a)『ハンセン病の基本について学ぶ』シリーズ：『ハンセン病とはどんな病気？』『ハンセン病の歴史についで学ぼう』『ハンセン病回復者の語りから本質を炙りだす質的研究でどんな研究？』など、ハンセン病回復者の体験を理解しディスカッションを進める上で、基盤となる知識を、簡潔・平易に理解できるデジタル教材を作成した。

b)『ハンセン病と共に生きる』シリーズ：『ハンセン病者の障害が重いのはなぜなのか？』『ハンセン病者は貧困の中をどのように生き延びたのか？』『終生隔離によるハンセン病者の実存的苦悩とは？』など、ハンセン病者の語りを元に、現象の本質を探究した教材を作成した。

c)『艱難を超えた叡智』シリーズ：『ハンセン病回復者のスピリチュアル・ウェルビーイングとは？』『ハンセン病者は、終生隔離による実存的苦悩からどのように立ち直ったのか？』『ハンセン病回復者の捉えた美しき島　大島と哲学的思索』など、老境に達したハンセン病回復者のもつ人間的な強さ・魅力を伝える教材を作成した。

d）対象特性を考慮：医療系学生を対象とした『ハンセン病と医療倫理』、『新型コロナウィルス感染症とハンセン病』、コロナパンデミックによる入島制限下の、療養所への訪問希望者を対象とした『療養所の紹介ビデオ』など、対象特性に応じたデジタル教材を作成した。

e）公開範囲の検討：ハンセン病に関する教材には、ハンセン病回復者の証言など、取り扱いに注意を要する内容が含まれる。また、授業の目的・目標に応じて教材を選択すると共に、その教材をどのように受講生の学びにむすびつけるのかを考慮した慎重な取り組みが必要である。公開範囲については、療養所・入所者自治会・ハンセン病倫理研究会を中心に検討している。

(4)発展への布石

①ハンセン病倫理研究会の創設

本企画を継続発展させる受け皿として、ハンセン病倫理研究会を設立した。設立の趣旨は、a）ハンセン病回復者の「今」を支える、b）集いの場、c）ハンセン病を語り継ぐ、d）ハンセン病に含まれるの現象の本質(普遍的意味)を明らかにする、e）世界に向けての発信である。

②『ハンセン病と人間の尊厳』の発刊

ハンセン病倫理研究会の機関紙として、『ハンセン病と人間の尊厳』（ISSN　2436-9039)を刊行した。本誌は、ハンセン病に関する学術論文の掲載を主たる目的とするが、、ハンセン病回復者・療養所スタッフ・ボランティア・学生・市民など、ハンセン病に関心をもつ人々の交流の場とすると共に、ハンセン病を語り継ぐ機会とする。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Makiko Kondo, Mikako Yamaberi, Hitomi Yamao, Masato Muguruma, Kayoko Furochi, Shiho Oka, Aiko Matsushita	４．巻 1
２．論文標題 Spirituality and Hansen's Disease: Spirituality' Conceptual Structure and Hansen's Disease History - Part One	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Quality of Life, IntechOpen	６．最初と最後の頁 235-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5772/intechopen.92243	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Makiko Kondo, Mikako Yamaberi, Hitomi Yamao, Masato Muguruma, Kayoko Furochi, Shiho Oka, Aiko Matsushita	４．巻 1
２．論文標題 Spirituality and Hansen's Disease: Spirituality' Conceptual Structure and Hansen's Disease History - Part Two	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Quality of Life, IntechOpen	６．最初と最後の頁 249-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5772/intechopen.92735	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Makiko Kondo, Sachie Okanishi, Etsuko Arai, Kumiko Morita, Maki Iwamoto, Masako Hosohara	４．巻 1
２．論文標題 The Moment of Establishing Transpersonal Caring in a Grieving Adolescent Daughter beside Her Mother's Deathbed and Hansen's Disease Survivors Sharing Their Life Review	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Empathy Study, IntechOpen	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5772/intechopen.92641	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 横山深雪，新田千夏，香川秀子，大藪隆昭，近藤真紀子
２．発表標題 夢の実現プロジェクト－写真と人生の語り－
３．学会等名 第32回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 藤原満紀，川北万幾，近藤美津乃，佐立実佐恵，森木雅代，近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病回復者が持つストレングスの検討
３．学会等名 第32回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松下愛子,香川秀子,岡千穂,岡野美子,池永禎子,中川真砂美,近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病者の四国遍路巡礼に関する集合的記憶の保存
３．学会等名 第32回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宮地直美，竜中加奈，山尾日登美，真田真紀，香川秀子，近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病療養所における入所者への生きがい支援に対する看護師介護員の活動評価
３．学会等名 第14回中国四国地区国立病院機構国立療養所研究学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中井有紀，比知黒きかる，本木明美，大藪隆昭，坂口公彦，中川真砂美，近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病療養所における回復者へのきめ細やかな看護・介護の提供を目指して-看護師・介護員の協働体制の強化-
３．学会等名 第14回中国四国地区国立病院機構国立療養所研究学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 藪内早緒理，岩﨑督典，坂口公彦，新上仁美，近藤真紀子
２．発表標題 長期間病棟に入院するハンセン病回復者の思いをかなえるケア －A氏が幸せを感じる援助－
３．学会等名 第14回中国四国地区国立病院機構国立療養所研究学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大藪美久仁，蜂須賀美江　山田ひとみ　藤川美恵　　近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病後遺症である全盲・知覚麻痺を抱える入所者の生活の工夫　第1報　重度重複障害を抱えて生き抜いたA氏の声
３．学会等名 第30回ハンセン病療養所コ・メディカル 学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 山田ひとみ，蜂須賀美江，藤川美恵，近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病後遺症である全盲・知覚麻痺を抱える入所者の生活の工夫　第2報　重度重複障害を抱えるA氏への支援に対する振り返り
３．学会等名 第30回ハンセン病療養所コ・メディカル 学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 藤本利貢，土居明美，渡邊真紀子，近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病療養所におけるコミュニティサポート活動による看護職員の心理的実感
３．学会等名 第30回ハンセン病療養所コ・メディカル 学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 溝渕靖幸，林隆郎，藤原満紀，佐立実佐恵，藤川美惠，近藤真紀子
２．発表標題 Ａ氏の意思を尊重した看取りにおける取り組み
３．学会等名 第72回国立病院病院総合医学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐立実佐恵，緒方栄子，豊嶋章，森木雅代，近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病療養所の看護師・介護員が捉える高齢化した入所者への家族的関わりの在り方
３．学会等名 第17回中国四国地区国立病院機構国立療養所看護研究学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山尾日登美,宮地直美,中岡初枝,近藤真紀子
２．発表標題 個人的価値カードから見出すハンセン病回復者の価値観
３．学会等名 第33回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤本利貢,川東茂雄,尾越和代,河西純,山下美智子,近藤真紀子
２．発表標題 知覚障害に関するハンセン病回復者の主観的体験
３．学会等名 第33回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岩田学武,長尾照代,坂口公彦,山下美智子,近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病回復者が認識するCOVID-19のパンデミック
３．学会等名 第33回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 井上 美樹，尾崎 理沙，長田 佳代，岡田 由紀，瀬元 清美，川野 かおり
２．発表標題 ハンセン病療養所における人生の最終段階の医療に関する意識調査 -看護師・介護員の比較から見えてきたACPの普及推進の課題-
３．学会等名 第17回中国四国地区国立病院機構国立療養所看護研究学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 平尾さやか,近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病療養所で生きた夫婦の歴史と関係性　-妻の回想-
３．学会等名 第33回ハンセン病コ・メディカル学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 平尾さやか,近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病療養所で生きた夫婦の歴史と関係性-夫の回想-
３．学会等名 第33回ハンセン病コ・メディカル学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 藤田和恵,近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病回復者から食べ物を渡されたと時の看護師の倫理的ジレンマ
３．学会等名 第32回ハンセン病コ・メディカル学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 井上美樹,近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病療養所における人生の最終段階の医療に関する意識調査-厚生労働省の調査結果と比較検討からの課題-
３．学会等名 第32回ハンセン病コ・メディカル学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 髙橋邦子,谷川貴浩,大藪隆昭,香川秀子,近藤真紀子
２．発表標題 大島青松園の写真を題材とした回復者による歴史の探求 ―第一報：写真の選別と分類―
３．学会等名 第31回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 上村理砂,穴吹俊典,豊嶋章,坂口公彦,中川真砂美,近藤真紀子
２．発表標題 ハンセン病療養所で初めて働く職員の戸惑いと発見
３．学会等名 第31回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 西本梨絵,宮脇秀子,久保宗子,山下美智子,近藤真紀子
２．発表標題 閉ざされたハンセン病回復者の心に近づき隠された本心を探る －日常生活の中で生きがいを見出す試行錯誤(実践報告)－
３．学会等名 第31回ハンセン病療養所コ・メディカル学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川井郁代,桝山友吾,藤原満紀,佐立実佐恵,森木雅代,藤川美恵,近藤真紀子
２．発表標題 身体的リスクが高いハンセン病回復者A氏の自室生活を支える看護師・介護員の認識
３．学会等名 第73回国立病院総合医学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 脇林清，ハンセン病倫理研究会，国立療養所大島青松園，国立療養所大島青松園入所者自治会	４．発行年 2022年
２．出版社 風間書房	５．総ページ数 162
３．書名 ハンセン病者が生きた美しき島　大島ー自然の語り対話する哲学者　脇林清の半生と写真集ー	

１．著者名 脇林清，ハンセン病倫理研究会，国立療養所大島青松園	４．発行年 2022年
２．出版社 風間書房	５．総ページ数 162
３．書名 ハンセン病者が生きた美しき島　大島ー自然と語り対話する哲学者　脇林清の半生と写真集	

１．著者名 Makiko KONDO, Oshima Seisho-en	４．発行年 2019年
２．出版社 Horizon Research Publishing	５．総ページ数 838
３．書名 Life Review of Aging Japanese Hansen's Disease Survivors - Deeply Deeply Closing Our Eyes in Order to See What We Truly Should See	

〔産業財産権〕

〔その他〕

1.「ハンセン病倫理研究会」を設立した.
https://hansen-rinri.jimdofree.com/

2.ハンセン病倫理研究会の機関紙「ハンセン病と人間の尊厳」(ISSN 2436-9039)を刊行した

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	亀岡　智美 (KAMEOKA Tomomi) (50323415)	国立研究開発法人国立国際医療研究センター・その他部局等・国立看護大学校 研究課程部長（教授） (82610)	
研究分担者	廣畑　聡 (HIROHATA Satoshi) (90332791)	岡山大学・保健学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	兵藤　好美 (HYODO Yoshimi) (90151555)	岡山大学・ヘルスシステム統合科学研究科・教授 (15301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	粟屋　剛 (AWAYA Tsuyoshi) (20151194)	岡山商科大学・法学部・教授 (35301)	
研究分担者	竹田　芳弘 (TAKEDA Yoshihiro) (20171655)	岡山大学・保健学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	齋藤　信也 (SAITO Shinya) (10335599)	岡山大学・保健学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	宮原　信明 (MIYAHARA Nobuaki) (70335610)	岡山大学・保健学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	岡　久雄 (OKA Hisao) (80116441)	岡山大学・ヘルスシステム統合科学研究科・特命教授 (15301)	
研究分担者	本村　昌文 (MOTOMURA Masafumi) (80322973)	岡山大学・ヘルスシステム統合科学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	桑原　敏典 (KUWABARA Toshinori) (70294395)	岡山大学・教育学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	大浦　まり子 (OURA Mariko) (40321260)	岡山大学・保健学研究科・助教 (15301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	生田　由加利 (IKUTA Yukari) (00534794)	岡山大学・保健学研究科・助教 (15301)	
研究分担者	樋之津　史郎 (HINOTSU Shiro) (80323567)	札幌医科大学・医学部・教授 (20101)	
研究分担者	吉川　あゆみ (YOSHIKAWA Ayumi) (00825755)	神戸市看護大学・看護学部・助教 (24505)	
研究分担者	真壁　五月 (MAKABE Satsuki) (90274050)	新見公立大学・健康科学部・講師（移行） (25302)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関